■図書紹介■

谷川彰英著

# 『柳田國男　教育論の発生と継承 ―近代の学校教育批判と「世間」教育―』

三一書房，1996年，366頁，8000円

二　谷　貞　夫*

本書は，著者が1996（平成８）年１月，筑波大学から博士の学位を取得された論文「柳田国男における教育思想形成と社会科教育論の展開」を出版したものである。氏が何時になったら，本書の出版をするか待望していた一人である筆者は，氏の業績に心からの祝福を贈りたい。

社会科教育学研究に携わってきた者ならば，氏が「柳田社会学」研究者であることは知らないものはいないであろう。氏が社会科教育研究に携わる教育学者であることは周知のことであるが，その研究スタイルが，研究室にのみ篭らず，現場の研究実践に常に根差しながら，社会科教育実践研究の立場を堅持してきた気さくなものであり，まさに「柳田社会科」なのである。だからこそ本書の出版が待たれていたのである。また，他方，柳田国男の業績は直接的な学問的継承者たちである民俗学・民族学研究者や歴史研究者，さらに文化人類学者や社会学者などによって明らかにされてきた。その著作は，枚挙に暇はない。しかし，氏の柳田国男への切り込みは独特であり，柳田研究者が手にするよりは，ひろく教育に関心のある者，教育実践者，社会科教育に携わる者が必読すべき柳田研究というべきであろう。何故かと言えば，アメリカ社会やあるいは西欧社会における教育，欧米風市民社会に発する教育研究ではなく，日本社会に立脚する自前の社会科教育に関する教育研究の筋道を読みとっていく研究書だからである。

本書の構成は，以下のようになっている。

序章　柳田国男研究の課題と方法
第Ⅰ部　柳田国男における教育思想の形成
　第一章　柳田国男における教育思想の原型
　第二章　日本民俗学の成立と歴史教育論
　第三章　伝承的世界と国語教育論
　第四章　柳田国男の児童観と子ども向け著作の位置
第Ⅱ部　柳田国男の社会科教育論
　第一章　「社会科」の成立と柳田国男
　第二章　「柳田社会科」の内容と方法
　第三章　柳田国男の歴史教育論の発生と継承
　第四章　柳田国男の社会科教育論の継承
　あとがき／［参考資料］柳田国男・教育関連著作目録／索引

第Ⅰ部は，戦前の柳田国男の教育思想の形成過程と特質について論述しており，第Ⅱ部は，戦後の柳田国男の新教育への期待と取り組んだ新設教科「社会科」について分析・考察するもので

* 上越教育大学学校教育学部

あり，柳田社会科教育論・歴史教育論の継承発展を論究している。

第Ⅱ部第二章は，必読である。社会科の将来を考える時，「柳田社会科」の発展継承にカギがあるからである。そのキーワードが世間であり，世の中であり，社会科の社会とは「気持ちは世渡りとか，世の中の道とかいったような口言葉にも結びつけて始終考えることをやらなければいかぬ。」（221頁）と柳田の言葉に象徴される。谷川さんは（さんという敬称は，学術誌に馴染まないかもしれないが，世間という近い人間的距離感，親しい尊敬の意味を込めて，以下さんを使う），このことに触れて，「柳田国男の学問は，常に常民生活を基底にすえつつ，近代の学問観を批判し続けた」といい，「近代教育に対しても，柳田は同じような角度から批判を繰り返している。」と捉え，「日本人の伝統的な社会観であった『世間』から，日本の近代教育は離れてきてしまった。その『世間ばなれ』の教育の弊害を改めるものとして，社会科に期待をかけたのである。」（222頁）と柳田社会科の基本スタンスを分かり易くまとめている。

社会科解体を批判して，「世間から社会へと現代社会は変化してきたでしょう。それが，社会科教育の成果であり，公民的資質に裏打ちされた市民社会がやっと展開するようになったのでしょう。」という主旨から社会科存続を筆者は主張した。しかし，社会科を解体させたのは，「民主々義は定着したから，社会科の役割は終わった」という立場だった。その時の「社会科」の社会は世間ではなく，観念的な西欧近代市民社会論の社会であり，庶民の民主的感覚から発した存続論でなかった。いま，谷川さんの柳田社会科を読んでいると日本の社会科は，やはり庶民が世間を語り，問題解決する，「かしこく正しい選挙民」となるように展開すること。それがいかに実際的であるかを知らされる。歴史教育論においても，実際的である。例えば，歴史教育における歴史教科書不要論の展開は，根本のところに史心の教育があり，教科書で歴史が終わらないことをどう捉えさせるか，柳田史学と歴史教育の本質が明らかにされている。しかし，21世紀の日本の教育と社会科の再構築を考えるとき，柳田社会科研究の一端を紹介するだけでなく，全体を紹介しながら，谷川さんの社会科論との関係で論じるべきであろう。しかし，微力な筆者にはとてもその批判的検討はできない。本書読者諸兄姉の庶民的地力に待つ他ない。今，筆者が本書を読みながら，期待することは，日頃から谷川さんの言動でもわかるように，「人間味あふれた論客であり，実践と理論を統一しながら作業を進める行動的な社会科教育研究者」（本多公栄さんの寸評）であり，柳田の言う世間にどっぷり浸かりながら，日本独自の自前の社会科を批判的に創造することにつきよう。つまり，本書のサブタイトルである“近代の学校教育批判と「世間」教育”が物語っているように，読者が現代の学校教育の諸問題を克服する方途は，常民＝庶民として世間科を実践し，谷川さんとともに問題解決的な社会科を批判的創造することであろう。